

ベルギー領コンゴの独立 ①

おやさと研究所教授
森 洋明 Yomei Mori

コンゴ共和国の首都ブラザヴィルとコンゴ民主共和国の首都キンシャサは、コンゴ川を挟んで隣接しており、その川幅は約4kmである。ヴァチカンを除けば世界で最も接近している二つの首都だ。この二つの都市を橋で繋ごうという計画が幾度か議論されてきたのだが、未だに実現していない。さまざまな理由が挙げられるだろうが、両国が独立以降に辿った道が大きくことなつたことも、その一因であるように思われる。

コンゴ民主共和国は、本稿でも以前触れたように、ベルギー領になる前は、ベルリン会議(1884～1885年)でベルギー国王レオポルド2世の「私有地」として認められた。ゴムの採取のために過酷な労働を現地人に課し、数百万とも言われる犠牲者が出たことで、ベルギー政府が王の私有地を買い取り、統治を引き継いでいった。

ベルギーの植民地統治の特徴としては、現地人に対する課税や賦役、移動の制限などは隣国のフランス領コンゴと大差ないが、植民地の産業の発展に力を注いだことが挙げられるだろう。ベルギーの約80倍とも言われる広大な領土は4つの州に分割され、現地人も責任者として行政の一端を担うことができた。また、商業の活性化が図られるなかで、現地人の自由な商業活動も一部認められていた。

コンゴ川流域の熱帯雨林地帯に位置するこの一帯は、鉱物資源が豊富である。その開発のためベルギー本土から白人が多く移住し、その数は3千人が10万人近くにもなった。それとともに、各地で都市化が進んでいった。また、現地人の官吏を養成する学校や黒人の初等教育も充実していった。

資源の開発は第2次世界大戦以降、世界的な需要の高まりとともに一層盛んになり、大戦で疲弊したベルギーの戦後の復興にとってより重要なものとなっていった。ダイヤモンドやウラニウムは世界の市場の半数を産出していった。1949年からは、経済活性を目指した開発計画が打ち出され、その一環として空港や国内の幹線道路などが整備されていった。ビールやセメントなどは、アフリカ全体でも有数の基幹産業となった。

産業が活性化するとともに都市人口が増加し、同時に都市プロレタリアとなった黒人が増えていく。「民族自治権」という世界的な動きに刺激を受け、黒人の権利が主張されるようになる。とくに隣のフランス領コンゴがフランス共同体の一員として一定の自治権を得たことは、川を隔てたコンゴにも大きな勇気を与えることになる。また、ガーナで開かれた「全アフリカ人民会議」(1958年)に出席したパトリス・ルムンバ(Patrice Lumumba)が、エンクルマなど他のアフリカで活動する民族主義運動の指導者と接触し、大いに感銘を受けたことも大きく影響したようで、彼が率いる「コンゴ民族運動」による独立への動きはその後より急進的となっていった。

ベルギー政府はコンゴの独立に対して、積極的に考えていたわけではなかったようだ。その背景には、一つには豊富な地下資源がヨーロッパの小国にとって重要なものだったことが挙げられよう。50年代のベルギーの国内総生産の12%はコンゴが担っていた。もう一つには、領域内では当時、独立に賛成する派と反対する派で意見が二つに分かれており、国民的な一致は実現しない

ものだと考えていたからだった。実際、独立前には大きく4つの派閥ができていた。親ベルギー派のボリカンゴ(Bolikango)とチョンベ(Tshombe)、反ベルギー派のルムンバとカサブブ(Kasavubu)の二つの派に分けられるが、それぞれにまた中央集権的な国家を目指すのか、民族ごとに分断した連邦政府、あるいは地方分権を採用するのか意見が分かれていた。

ベルギー政府はこうした対立を利用して、植民地をコントロール下に置こうとしていたようだが、1960年1月にベルギーで開催された会議で、カサブブ、ルムンバ、チョンベの3派が意見を一致させ独立を選択したことにより、ベルギー政府は急遽、独立を認めざるを得なくなった。とくに、ベルギー政府によって逮捕されながらも、その説得力で多くの国民の支持を得たルムンバの働きは大きかった。そして、この会議からわずか半年後の6月30日、コンゴはベルギーから独立することになる。それはフランス領コンゴとは異なり、一国の独立として準備がまだまだ十分に進んでいないなかでのことだった。

独立式典に出席したベルギー国王が「コンゴの発展は祖父のレオポルド2世とベルギー国のおかげである」と述べたことを受け、初代大統領となったカサブブは、これまでの王の庇護に対し感謝の意を表明した。しかし、反植民地派の急先鋒で初代首相となったルムンバの演説は、「コンゴの独立は、我々の力を結集し、多くの血を流した戦いの結果でなし得た。このことをコンゴ人の誰も忘れることはないだろう。」と言い、会場の融和的なムードを一変させた。彼のこの演説は、独立式典の会場にいたコンゴ人だけでなくラジオを聞いていた国民にとって、大変痛快な内容であり、多くの人たちを歓喜に沸かせた。

しかし、政治的な独立は達成されたものの、実質的にはコンゴ人の生活が大きく変わることはなかった。それどころか、「何も変わらない」ということが逆に、国民の新政府に向けた不満へと変わっていった。とくに軍では白人の将校がその権力を保持したままであり、また軍幹部が「独立前＝独立後」ということを黒人兵士たちに明言したことで、兵士の反乱が起きる事態となり、社会は混乱の道を進んでいくことになる。そしてそれは、やがて国全体を巻き込む内戦へと発展していくのだった。いわゆる「コンゴ動乱」の始まりである。

現在、ブラザヴィルとキンシャサを結ぶ交通手段は、空路もあるが主に川を渡る船である。モーターボートで約15分で対岸に着く。距離的な近さを感じる一方で、査証検査など出入国の手続きにはその数倍の時間を要し、2国の距離も実感される。ただ、コンゴ川の下流に行けば、川を歩いて渡れるところもあるらしい。さらに南方ではコンゴ川はコンゴ民主共和国内に流れているので、二つのコンゴには陸の国境が存在する。森のなかでは国境を自由に往来できるところもあると聞く。現在のアフリカの国境線が「自然」を考慮せず、ヨーロッパの勝手な都合で「恣意的」に出来上がったものだとあらためて感じられる。



コンゴ川対岸に見るキンシャサ